

木下トギス

昭和二十四年三月二十六日 鎌倉五輪会館 美術部 第六十七号  
今期二巻四月一日起發行 第四十二三巻 第四号

# 木下トギス

四月号



## 風雅の小筥〔二十七〕

廣太郎

私は毎月ある俳句総合誌の投句欄の選をさせて頂いており、それは御投句された葉書のコピーをその編集部から送ってこられるのであるが、その投句葉書の記入欄の中に、その投句者の使用している仮名遣いについての二者択一がある。そう俳句を旧仮名遣いか新仮名遣いのどちらで投句しているかという選択である。大体八割程の方が旧仮名遣いをお使いのようだが、新仮名遣い使用の方もおられる事も確かだ。勿論選をする時には、参考にごすれ新仮名遣いの句は絶対採らないという事は言えないが、やはりホトトギス主宰としては、俳句は旧仮名遣いであるべきだと常々思っている。確かに私は戦後生れで、旧仮名遣いの教育は、それこそ古典の授業でしか受けておらず、最初に俳句に出会った時、何故旧仮名遣いなのか疑問に思っていた事も確かであるが、今では、この俳句という五・七・五という、恐らく世界一短い詩として完成された背景には、旧仮名遣いは大きな役割を果たしていると思うのである。例えば一例として、今でも時々投句の中に「ろう梅」と平仮名と漢字を組み合わせている、これは季題であるが、この使い方をされると「臘梅」「老梅」どちらの意味か全く判らなくなり、以前「消息」欄でも書いたのではないかと思うが、必ず御本人に問合せをされているのである。前者は「らふ梅」、後者は「らう梅」である事は言うまでも無いが、このように旧仮名遣いであると、平仮名の場合意味が特定出来るのである。ここでも何度も申し上げているが、一語一語是非辞書で確認して頂きたいと思うのである。

旬日記 汀子

平成三十一年四月一日 ロイヤル吟行句会

エイプリルフルに決まる元号も  
辛夷咲くいつもの道を通り来し  
一年といふ歳月も臚かな  
悼みつ過ぎゆく月日臚かな  
病む友も臚の月日過ぎゆける

四月六日 芦屋ホトギス会

渋滞の先の先まで桜かな  
麗かとやうやく言つてみることに  
み吉野の旅はまだ先花心

四月七日 下萌句会

二代目のミモザの花も今盛り  
四月八日 虚子忌

止みさうに止みさうに雨降る虚子忌  
徒ならぬ花冷かこちぬし忌日  
はるばると雨をいとほぬ虚子忌かな

四月九日 大阪倶楽部

春暁を発ちて家路の常のごと  
ひと眠りして春暁を発ちて来し  
臚夜や旅に泊つ人帰る人  
今年又虚子忌に欠けし人のこと  
囀の増え来し朝の家居かな

四月九日 綿業倶楽部

咲くまでの桜の遅速問ふことも  
旅終へて又次の旅春眠し  
春眠に従ふ戻りはなかりけり  
もう桜遅速を問はぬ旅仕度

四月十一日 清交社

風見えてゐるのは柳並木かな  
勿体なき朝寝の出来ぬ齢かな  
知らぬ間に来て去るもまた燕の巢  
吹かれ立つ柳の風でありしかな  
朝寝して一日追はれてゐしことも  
咲きつづく花の旬日とどめたく  
四月十二日 工業倶楽部

すれ違ふ朝寝の顔でありしかな  
旅も又日常も又花の中  
朝寝せし心旅路に立て直す  
東風荒る朝心して旅立ちぬ  
明日は又早出とならん花の旅  
四月十三日 吉野山くつぎの旅

花の句碑幾年旅をせし吉野  
水音のいつも絶えざる花吉野  
舞ふ落花とどまる落花さそひては  
囀に山路深まるところかな  
この花の日和に旅路はじまりし  
み吉野の花に貧しき言葉呑む

水音の絶えざる宿の花心  
囀や吉野の宿でありしこと  
一片の落花にどつと山の風  
夕風の止みて落花のとどまりぬ  
花眠りたる半月に守られて  
夕桜消え半月と入れ替はる  
日の落ちて桜も闇に沈みたる

四月十四日 吉野山くつぎの旅

雑魚寝にも馴れて吉野の花の旅  
囀のはじまる朝の吉野山  
み吉野の花に負けたる名句かな  
四月十六日 無名会

臚夜の眠りの浅き旅疲れ

辛夷咲きいつもの道とならざりし  
一片も散らぬ辛夷の三日目に  
旅終へて臚に過ぎてゆく月日  
迷ふ筈なき道迷ひたる臚  
稿債に向へば臚なりしかな  
一日の臚の時間過ぎ易く  
四月十七日 夏潮句会

春愁の消えて歓迎する心  
癒えられしことに春愁なかりけり  
何よりも元気な笑顔春灯下  
出席の語る消息あたたかし  
来年の予約も花の旅なれば  
雀の子らしき動きを見てをりし  
何よりも癒えて春めく心かな  
四月十九日 アネモネ句会

わが庭にはじまる月日初花に  
花の旅話外れてもまた戻る  
共に旅せし話題より花のこと  
まだ見えぬ春の満月てふ今宵  
四月二十五日 きさらぎ会

旅終へて桜の日々のなほつゞく  
みよし野の桜に旅の舵を取る  
時の経つ早さに終る桜かな  
鳩の巢の掃除の柵を受け持ちぬ  
降り出して桜終焉告げてをり  
降り出して夏近づけてをりし雨  
四月二十日 時雨句会

遠くより見て遠ざかる花馬酔木  
みよし野の桜餅にも名残あり  
語らばや馬酔木の花に家居して  
春眠のつづきのやうな家居かな  
雨も又春寒誘ふ午後となる  
四月二十七日 句会と講演の会

旅疲れ癒え春愁の残りたる

# 廣太郎旬帳

廣太郎

平成三十一年四月一日 カトリック新開選者吟

初雷や神のみことば伴ひて

四月四日 蕉心会

水温む流れは令和へと続く

蕉像の花守めいてある視線

春日傘開き句心開きゆく

春の雲とは消えてゆく溶けてゆく

醉客に水尾歪めゆく花見船

一片の落花大地の句読点

ホ誌うらから三角池に蝌蚪そ

居るやんか三つ時代の駆け抜けて

老後とは何時のことやろ竹の秋

四月六日 芦屋ホトギス会

春の夜や恋に破れて君とゐて

チュールリップ百万本の赤の黙

四月七日 野分会菅屋例会

蕨餅山の消息練り込まれ

朝寝する夢は必ず君の居て

蕨餅黄粉に噴せる白寿かな

四月七日 青嵐会菅屋例会

春日傘差さねば眩し過ぎる君

春日傘閉じて佳人を返上す

四月八日 虚子忌

鶯に空裂がれゆくはがれゆく

花冷の歩や忌心を携へて

虚子を知る人又一入逝く虚子忌

四月九日 むさし野吟行会

蒼天へ溶け込む一枝より落花

零れても零れてもこぼれても花

万象が落花に埋もれゆく刹那

雨に耐へ風に耐へ切れざる桜

四月十一日 土筆会

北国の点描としてライラック

蜂の巣に軒戦いてをりにけり

行春や墓石は虚子とのみ書かれ

行春の果の日々太りゆく恐怖かな

行春の弥撒や一周忌の集ひ

行春や祝ぎの報せは唐突に

四月十三日 吉野くつろぎの旅

江戸の花発ちて吉野の花万朶

花を見るより人を見る吉野かな

花の山飛行機雲を放ちゆく

平成を送り令和を招く花

花見茶屋跡形も無く失せにけり

くつろぎといふ名の苦行亀鳴けり

朝桜吉野の山気吸ひ込めり

雲切れてゆく朝桜明かしつつ

都落ちせねばならぬか月朧

この命散り込む花を見るまでは

決断を迫られてゐて大朝寝

四月十五日 朝日カルチャー若草句会

入学の子の背といふ希望かな

日の本が吉野の花に従へり

契約の今年で終りたる朧

朧より一片落ちてくる吉野

満開の花も君には及ばざる

玄関を一步出るより入学児

パイプ椅子足ぶらぶらと新入生

四月十六日 友人御尊父様悼句

春光の船出は父の星の下

決断といふ朧夜の現かな

四月十八日 登高会

仰天の話飛び込む春の昼

川柳吹かれ未来は未知となる

大川の流れは永久に梅若忌

春昼の眠気を醒ます一事かな  
この柳過ぎれば観世能楽堂  
四月十九日 廣邦会

平成の記憶を載せて桜舞ふ  
みよし野の桜に神を見てをりぬ  
子雀に都心の空気柔らかに  
四月二十一日 青嵐会東京例会

残花舞ふ都心の空を引き寄せて  
タワ一の秀復活祭の天を刺す  
桜薬降る新しき世を迎へ  
四月二十一日 野分会東京例会

蕨餅苞に命をかける人  
恋三つ破れしよりの大朝寝  
佳人二人迎へ朝寝はしてをれず  
蕨餅苞にみちのく美人かな  
四月二十三日 若水句会

魚の棚を跨いで修す人丸忌  
その中の黄に日を集めフリージア  
春の星仰ぎ希望は未だ捨てず  
変りゆく世を見て下して春の星  
令和の世近づいてゐる人丸忌  
四月二十四日 目黒学園句会

山葵田にへアピンカーブ従へり  
目の合ひしより猫の子の虜かな  
春の宵明星といふ孤独かな  
空の青より春宵の漆黒へ  
四月二十五日 徳源寺句会

桜餅わり句心の湧く吉野  
華やぎを大地に納め花曇  
道明寺好む漢や桜餅  
四月二十七日 ホトトギス社句会

パンジーの白曇天を払ひゆく  
春愁といふ希望への序曲かな  
春惜む年尾の時代偲びつつ  
春愁を払ふ講師は野分会

# 雑詠 廣太郎 選

ややかすれ声なる虚子の手毬唄 東京 今井千鶴子

母の声耳に残れる手毬唄 同

思ひ出と共に古りゆく手毬唄 同

鬮はす俳論ありておでん酒 相模原 木村享史

おでん酒虚子のことなら負けはせぬ 同

虚子貶すのはまた君かおでん酒 同

日表に日裏を重ね山眠る 群馬 中杉隆世

石魂に見ゆる夢や山眠る 同

迷ひより覚めざる如く山眠る 同

濠あれば川あれば池あれば鴨 京都 山崎貴子

鴨浮寝しても方向間違へず 同

鴨の陣あまた置き琵琶湖の余裕 同

慰めも励ましもせず椿見る 神戸 千原叡子

花見舟までも電話の追ひかけ来 同

前うしろ向かせ春著の人囲み 同

岳麓の唐松落葉匂ふ朝 東京 川口利夫

みづうみの朝日の中へ散るもみぢ 同

掃除して老柳荘の秋惜む 同

愚痴聞いてやるも友情秋時雨 福山 竹下陶子

夜学子の眠気をさます顔洗ふ 同

うとき眼にかまつかなほも燃え立てる 同

一センチに満たぬ一年日記果つ 東京 田丸千種

古日記母の文字と見紛へり 同

結末のなきがしあはせ日記果つ 同

走り根にひろがつてゆく秋思かな 熊本 岩岡中正

とがめだてすまじ林檎の赤ければ 同

林檎重しカインの裔の掌に 同

初霜や曇りガラスのやうな窓 袋井 湖東紀子

続きたる日和に冬を忘れをり 同

神留守の絵馬ことごとく風に鳴る 同

北は雪南の旅は日本晴 長岡 安原葉

都心雨北国晴れて冬ぬくし 同

解体の近き城のせ眠る山 同

浅漬に白き歯応へありにけり 龍ヶ崎 今橋眞理子

吹かれゆく音引きずつて朴落葉 同

冬構へと波音のかぶさり来 同

一献を一気にあふり火祭へ 神戸 山田佳乃

冬耕や見えないものを鋤き込んで 同

浅漬を食む父の音母の音 同

千面の赤に黄色と良き役者 同 和田華凜

神農の虎に魔除の化粧かな 同

牡蠣船に人影灯しをりにけり 同

# 雑詠句評 (三月号より)

一書読み終へて新幹線夜長 相模原 木村享史

## 兆てふ空とのあはひ薄紅葉 香川 湯川 雅

薄紅葉は、紅葉しはじめてなお薄いのを言い、やがて真紅に染まる色を予想させてくれる趣がある。作者は、晴れた日の大空の下で、見つけた薄紅葉に感動しながら、秋が深まって濃い彩りになる大自然の姿を心に思い浮かべているのである。(葉)

本来秋になると段々と色付く紅葉であるが、最近では冬になってからやっと色付く事が多いのではないかと思われ、やはり地球温暖化の影響だろうか。それでも紅葉し始める微妙な美しさは格別であり、その兆をこの句は見事に捉えている。空との対比がよりその姿を浮き彫りにしている。(廣太郎)

「夜長」の使い方にもいろいろある。その使い道では読書がまず一番に来るものだろう。勿論男性と女性ではいろいろ趣味も異なり女性ならば編み物や手仕事、男性ならば碁、将棋だろうか。しかし相対的には夏の暑さから解き放されて、男性女性を問わず、やっと本を読む気になつてくるのも秋の季節なのだ。一般的なことはさておき、同じ読書でも、作者は「新幹線」の中の時間の使い方で一冊の本を読み上げたのだ。その集中力はすごい。本を手に取ることはあつてもなかなか「一書読み終へて」となることはない。窓の景色を見ることがない夜の新幹線だからこそ読書に集中が出来たということも言える。「新幹線夜長」の措辞も初めてのこと。何気ない新幹線での一齣であるが、ユニークで面白い。(むつみ)

北海道から九州に至るまで、日本国内は新幹線が縦横に走っていて、全国津々浦々に張り巡らされる日もそれ程遠い未来ではないのかも知れないが、筆者も嬉々として利用している。作者もその新幹線の中で乗車時間を一杯使い、目的地まで有意義な時間を過ごされた。季節が颯爽と響いている。(廣太郎)

天地有情

山子選

行秋の風となりたる人のこと 熊本 岩岡中正  
 稿起こす白紙いちまい冬立てり 同  
 アイリスに紫の風宿る午後 東京 稲畑廣太郎  
 アイリスの庭へ初孫退院す 同  
 予報にはなき北国の秋時雨 長岡 安原 葉  
 役立ちてゐるとも見えぬ案山子かな 同  
 天人になりたる思ひ大花野 神戸 後藤比奈夫  
 花ごよみ貰ひて入る秋の園 同  
 相模原 木村享史  
 水禍癒えざるに秋さぶ雨がまた 同  
 秋時雨かと呟いて濡れてゆく 同  
 寄鍋に浪速の贅を尽くしたる 神戸 三村純也  
 寄鍋をつつき合ひみて馬合はず 同  
 外は雨なれど集へば冬ぬくし 東京 今井千鶴子  
 綿虫に夕日一すぢ届くとき 同  
 あきんどの町に師走といふ速度 神戸 和田華凜  
 昭和史を刻む時計よ冬館 同  
 偲ぶひとあまたなる宴初しぐれ 東京 山田閨子  
 シャンデリアしぐるる窓に映りたる 同

一羽翔ち万羽の鶴に守られて 宝塚 水田むつみ  
 鶴飛翔待ちゐる高き峰ばかり 同  
 朝寒の旅にしあれば妻恋ほし 仙台 赤川誓城  
 末枯の果てなる雪を思ひけり 同  
 御先祖を孫に話すや秋彼岸 福山 竹下陶子  
 しじみ蝶果てしむくろを仏前に 同  
 修二会の火原始のいろを揺れつづく 東京 今井肖子  
 遙か来て奈良に花待つ夕心 同  
 鶯の屢鳴き披講聴きとれぬ 神戸 千原叡子  
 黄桜のやや青ざめてゐる夕べ 同  
 鍋にのこる白菜くたびれ果ててをり 東京 高濱朋子  
 凧に寝つかれぬ子の背をさする 同  
 冬ざるる間も人間は老けてゆく 同 大久保白村  
 あとがきを書き終へ書齋冬ぬくし 同  
 山頂に向ふリフトに霧しまく 同 河野昭彦  
 霧晴れて全山錦となりにけり 同  
 摩耶山の寺に山茶花確と咲く 吹田 大橋 暁  
 元興寺の仏像重々しき冬日 同